

Tokai Fubokon Letter

第1回文化講座 ご報告

保護者と読む漱石の『ころ』

—高校では何故

『ころ』『山月記』『舞姫』を読むのか—

かずき
赤川航紀先生 (高校国語科)

【開講にあたって】

この講座は2年ほど前に赤川先生に依頼し、準備を進めていましたが、コロナ禍となつてしまい、なかなか実現できずにいました。この度、感染対策をしっかりした上で、スタディオールにて待ちに待った講座を開くことができました。



内容が難しそうで敬遠されるのではないかと、こんなご時世に人が集まるだろうか？ という担当者の心配から、父母懇談会以来の派手なポスターを準備。赤川先生の考える講座のねらいを明記し、しっかりPRしたところ、予想に反し、50名の枠がわずかに数日で埋まってしまうほどの人気ぶりでした。そしてアンケートでは「息子が勉強している内容を自分も知りたかったから」という参加理由がダントツに高く、文化講座の意義と、赤川先生のねらいは達成されたように思います。

さて T.F. Letter

No.10でもご紹介した赤川航紀先生による、夏目漱石『ころ』の講座。ここからは文化講座の内容を実際の参加者のレポートでご報告いたします。

私は元々読書が趣味で、夏目漱石も好んで読んでいました。今回は麻布高校・東大・同大学院出身の赤川先生による『ころ』の講座ということで、難しく理解できないのではと緊張しました。しかしそんな心配は不要だったようで、先生が直前まで推敲したというA4用紙3枚分の資料を元に、なぜ高校2年生で『ころ(1914年)』『山月記(1942年)』『舞姫(1890年)』を読むのかを、私たち保護者にとっても分かりやすく説明してくださいました。

【講演のあらまし】

この三作品に共通するテーマを「自己のイメージに強く捕らわれる」「近代を生きる難しさ」と考えると、将来の選択を迫られた高校生たちに相応しい内容であることが分かりました。「自尊心が高い、プライドが高い」というのはよく生徒たちに「自分に自信がある」と誤解されている言葉ですが、「自己イメージに強固に捕らわれていて、そこから外れるのを極めて恥ずかしいものとして怖れること」と説明されました。これは特に1学期で扱う『山月記』の中で中島敦が意識して書こうとしたことで、自由と平等が与えられるようになった近代においては「自分というものをどう考えるのか」は、非常に大きな問題になっていることを学んでもらうとのことでした。



2学期に学ぶ本題の『ころ』は、まず登場人物たちの共通点の分析から始まりました。皆、近代的意識の根付いていない「田舎」を持ち、そこを離れて自由な「都市=東京」に暮らしています。ところがそれぞれの故郷(前近代の暗喩)に対する感じ方を変えること

2021年度第一回文化講座開催!!

7月16日(金)10時~11時半

夏目漱石 『ころ』

保護者と読む漱石の『ころ』

—高校では何故『ころ』『山月記』『舞姫』を読むのか—

11月9日(金)10時~11時半

スタディオール

赤川航紀先生講演

夏目漱石 『ころ』

http://tokai-fubokon.sakura.ne.jp

で、世代間にギャップがあることを漱石は上手く表現していました。「先生」に代表される前近代を色濃く残した世代は、近代的な自己の確立に挫折してしまうというのが、『こころ』の大きなテーマであると赤川先生は述べられ、とても理解が深まりました。

その後、「K」と「先生」の自殺の原因を、それぞれあらゆるセリフや行動から赤川先生なりに丁寧に読み解いていきました。「先生」は近代の人間として自由に独立した生き方をしようと思っていたのだけれど、知らず知らずのうちに家族という前近代的なものに対する愛着が頭をもたげてきてしまいます。そしてそれがいつの間にか自分の行動をコントロールしていたことに、「K」の自殺に思いを巡らす中で気づいていきます。自分は何者なのか、と知ったつもりでいても、実はそれは本当の自分でない可能性があることを『こころ』は提起している、とまとめられました。一度や二度読んだだけでは到底考えもつかない鋭い分析に圧倒されてしまいました。

『こころ』の後に読む『舞姫』も、主人公にフォーカスすると似たようなテーマが繰り返され、以上の三作品を高校生に読ませる理由としては、「今本当の自分と頑なに思っている自己のあり方に固執する必要はないのだ」というメッセージが込められているから、と結論付けられました。



赤川先生は事前のインタビュー記事で、悩みを受け止め向き合おうとする時には文学が良いと述べられています。まさに東海高校生たちが、この時期にこれらの作品に触れることは大きな意味があるのだと感じました。先達が何を悩み、考えてきたのかを知ることは現代人の支えとなり、私たち大人も文学作品に触れ合う重要性を教えてくださいました。

また受講した保護者から積極的に質問が出されま

した。その中で「こころ」が世に出されて100年ほどの間に、世の中がどう変わったのかという質問がありました。強い親に反発して自己を形成してきた過去の若者に対し、現代は「好きにしろ」という親の元でしたいことが見つからないということが起こっており、「こころ」の一步先に行く新しい悩みがあるのでは、と赤川先生は危惧されていました。時には融通の効かない親でいること、失敗したら終わりではなく、やり直すことができることを家庭で教えてあげて欲しいということでした。

学校の現代文の授業で、文学とはこういうものだと教えてもらえる生徒たちは幸せだなと感じました。それと共に遅ればせながらこの機会に共に学ぶことができ、本当に良かったと思います。

文学に込められたこうしたメッセージが子どもたちに伝わり、親としても真意を理解した上で、少しでも支えになればと感じた夏休み直前の貴重な時間となりました。

赤川先生からのメッセージ

まずは、このような貴重な機会を設けて下さった文化講座幹事のお母様方や北村先生に感謝の意を述べたいと思います。

本当にありがとうございました。

元々人前に出て話すのは大の苦手でいつもあがってしまっ(授業ではそうならないので、生徒をまだ「人間になった」とは考えていないのですね笑)、今回もとにかく一方的に話をする形になってしまい個人的には反省しきりなのですが、それでも皆さんが熱心に聴いて下さりとても有り難く思っています。

またたくさん感想をいただけて大変嬉しく思います。少なくとも保護者の方には文学だけでなくイタリア語・ラテン語に興味を持っていただけたようで、東海でのラテン語普及活動の第一歩を踏み出せたという点で本講座は私にとって大成功です笑

そして、これまで高2の現代文で教えてきた内容を



一つのテーマのもとでまとめることができたという点でも貴重な機会となりました。特に、なにかと評判の悪い『舞姫』も、確固たる自己を見いだせないことへの苦悩として『山月記』から続く近代的自己の問題に引きつけて読めばちゃんと面白い小説であると私自身確認できたので、非常に有意義でした。

講座に関して印象的だったのは、『ころ』の読解の仕方も私の話に対する関心の持ち方も、普段相手にしている生徒とは当然ながら全く違うということでした。思ってもいなかった



講演後

示唆に富む質問がいただけてとても参考になりました。今後授業に活かせればと思います。

赤川航紀

【参加者の感想】

➤ 『ころ』について、近代がテーマになっているというのは新たな発見でした。

そして、最近では自己肯定感の大切さに重きを置く話を多く耳にする中で、子供の全てを認めて、見守っていくというのが理想の子育てなのだと考えていた私にとって、『融通のきかない親というものがある程度子供達も必要としている』というお話は衝撃的でした。これからの子育ての中で心に留めておきたいと思います。ありがとうございました。(中1母)

➤ 子供が、普段どのような授業を受けているのかわかることができ大変貴重な時間となりました。帰宅して息子からも東海高校の授業とは、を教えてもらいました。面白く興味深い話でした。普段、子供と学校の話で共通する話がないので(私がよくわかっていないのでいくら説明してくれても理解できず息子に諦められてしまいます)、今日は参加して良かったと思っています。(高3母)

➤ いつも本を読んで、内容もちろん楽しめますが、作者のひととなりや垣間見えたりするのを面白く感じていました。

面白く感じていました。

先生の講座を受けて、社会的背景やその時代の人達の考え方、物事の捉え方の違いに思いを馳せたり、また反対に時間が経っても変わらない部分を見つけ共感できる面白さを改めて認識できました。時間を見つけて読書をしたくなる講座でした。(中3・高2母)

➤ 高校生の頃に読んだころを20年以上経って読み返してみても登場人物の印象があまりに変わっていることに驚きました。

当時は先生の事を偏屈な人しか思ってなかったのが、先生より年上になって読んでみるとなんと可愛らしい男の人に思えるのです。先生やKの心を溶かしてあげた奥さんやお嬢さんのように家庭の中ではそういう存在でよいと思いました。

舞姫も今読むとまた違う感想になるのか試しに読んでみようと思います。(中2母)

次号の掲載予定

第32回愛知サマーセミナーのご報告

編集後記

赤川先生の『ころ』の講演、読後感ならぬ聴後感(?)が素晴らしかったです。先生の分析によって小説の中に散りばめられた伏線が洗い出され、心理的アプローチで点と点がつながっていき、まるで霧が晴れていくように物語が鮮明になっていく感覚を覚えました。

『ころ』はもともと新聞小説で、読者の気持ちを引き延ばすミステリー形式であったことも知り、文豪夏目漱石の才能と、それを読みこなす赤川先生の鮮やかな読解力に感心してしまいました。

赤川先生、Grazie infinite!

質問にもあった赤川先生の子育て・教育論に力をもらった父母も多いと思います。3月の高2学年懇談会(T.F.Letter No.7 P.2 参照)において、伊東達也先生も同じようなことをお話されていました。東海生は父母・教員の熱い期待を背負うのではなく、バネにして羽ばたいてほしいと心から思います。